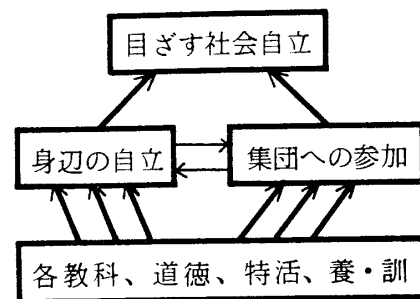


ある現状の中でも、このような社会自立を目標とし、目指すことは当然であろう。しかし、現実の子どもを前にして見ると、如何に目指す目標とはいえ、あまりにも現実離れを感じるのである。ひいては、学習内容の精選、指導法追究の視点までボケてくる。

この問題の解決には、地域社会との連帯、社会福祉との関連生涯教育の中での位置づけ、成人施設との連携など、精神薄弱者を取りまく諸問題との取りくみのなかで、より現実的なあるべき姿が模索されなければならないだろう。

また、子どもたちが自立する社会は、特別に準備されたものではなく、健常者と共存が要求される社会である。その上、対象となる子どもは多様であり、個人差が大きいとすると、精神薄弱児の指導は、上図に示すように、身辺自立と集団参加の能力を開発することから生活経験の拡大、定着の面から模索され、その指導は常に社会的な適応が指向されていることが効果的であると考えられる。

本校の表現化に視点をあてた指導は、以上の立場に立って実践しようとして試みているのである。



3 表現化に視点をあてた指導

(1) 表現化とは

表現とは、相手(対象)に何かを伝達するということである。伝達するという行為が、たとえ言語や身体を通して十分でなくても、相手の反応を期待する行為は表現であり、他の行為とは区別して考える。例えば、奇声を発してひとりで走り廻ったり、反対にひとりで静かに読書にふけっている。この場合、たとえそれが本人にとって充実した活動であるとしても、相手の心をゆり動かそうとする意志が見えない。これらは、表現を引き出す素材や結果であっても、表現化に視点をあてた指導を展開する立場からは、区別して考えることにしている。

表現化の化とは、表現する力とか表現の拡がりを表わしている。本校が、各分野を～化とよんでいるが、一般化しているのは社会化だけで、自立化、表現化、職業化というときの化は、一般化していない。そこで、社会化の化が、「社会のものになる」とか、「社会に拡がる」(広辞林)の意味をもつと同じ意味で使用することにした。従って、～化はそれ自体社会的意味をもっており、自立への方向性を示しているのである。

そこで、表現化をひとことでいえば、子どもの行為(行動)を積極的に表現とかがかわらせることで、諸能力の獲得や態度化をはかり、『生きて働く力』を定着させていこうということである。従って本校では、中核となる分野を表現化におき、社会自立を目指す目標を表現化においているのである。

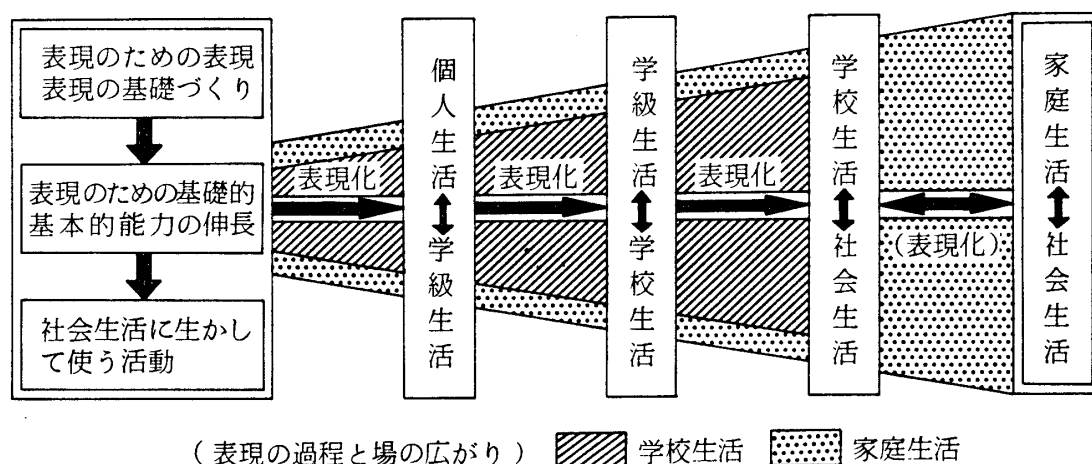
言い換えると、中核となる分野としての表現化は、表現化の内容を通して、感覚的、身体的、精神的な諸能力の発達を促し、生活の中で活かすための基礎的内容であり、目指す目標としての表現

化は、将来の社会自立に向って、各分野の内容を合科統合、拡大発展させ、具体化し、実践していくとするものである。

(2) 表現化と表現の過程

表現化に視点をあてた指導では、豊かな表現活動が展開されなければならない。しかし、子どもの現状をみると、表現活動そのものが理解できないと思われる子どもが想像できる。また、表現方法が未熟な子ども、さらに、同じ表現でも、上手下手と個人差が見られることも当然考えられる。

このように、多様な姿が予想できる子どもたちから、表現の芽を引きだし、豊かな表現を育て将来の社会自立に迫るには、下図に示す表現の過程を歩ませることが必要と考えた。



この図に示すように、子どもの表現活動は、表現の過程の段階を追って深められ、低次なものから高次なものへと諸能力が獲得され態度化される。同時に、表現そのものが、常に社会的意味を持ち、自立への方向を示すものであるという立場から、たとえ表現が低次の段階であっても、場の広がりの中で、学習がくり返され、それぞれの段階の中で、下手から上手へ、未熟から成熟へと社会自立に向って諸能力は定着していくと考えるのである。

また、表現化に視点をあてた指導では、家庭生活とのかかわりを見無視しては成立しないと考える。上図では、指導の結果が家庭生活とつながることを示しているのではない。表現活動の最初の段階から深い関連をもって学習が成立していることを示しているのである。

(3) 表現化と学習指導の基本的態度

表現化に視点をあてた本校の立場では、すべての教育活動が表現化に視点があたっていることになる。単純な数詞、乗法九九の繰り返し、漢字や計算のドリルなどは、本校のめざす社会自立に効果的に働くとは考えられない場合が多い。むしろ、知的障害のある子どもたちにとって、知育偏重の方向に進む恐れが多分にある。

従って、表現化に視点をあてるとは、子どもの今ある姿を出発点としてとらえ、表現するという行動を通して、知的にも態度的にも充実した生活ができるよう拡大していくことが、取り組みの基本的態度である。学習指導についても同じことが言える。次頁の図は、学習指導の基本的なあり方を示

したものである。即ち、分野としての学習内容は表現化を核にして諸条件を整備することではじめて学習が成立する。その学習は、常に生活の中での定着にむかって、統合された形で具体化され実践が展開されると考えるのである。

(4) 表現化と指導計画作成の基本的態度

① 段階別教育内容表を月別指導計画に編成する場合、当然子どもの発達の様相が的確におさえられていなければならない。また、計画立案にあたっては、行事や作業の内容、季節感などにより学習内容に一貫性のある単元の構成が常に工夫されていること。

② 表現化に視点をあてた指導計画の作成では、分野の1項目を取り出した計画であってはならない。学習は、表現化を核にして、他の分野と統合されて展開されることによって、生活場面への転移力、適応力の働きの弱い子どもたちの生きて働く力を強化することであると考えからである。そのためには、右図に示すような学習条件の整備が徹底して工夫されなければならない。

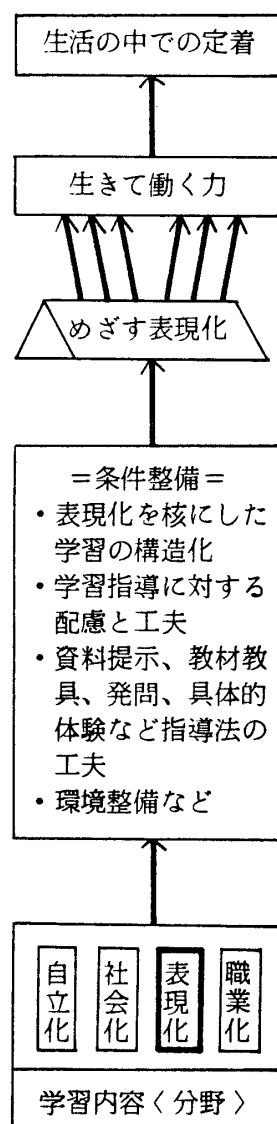
③ 指導計画の作成の中で、学習条件が整備されることによって、表現が生きて働く力として定着していこうとする見通しをもった取り組みが可能になる。言い換えると、表現化というプリズムを通すことで、はじめて生活の中での定着を可能にし、社会自立への道を歩むことになるのである。

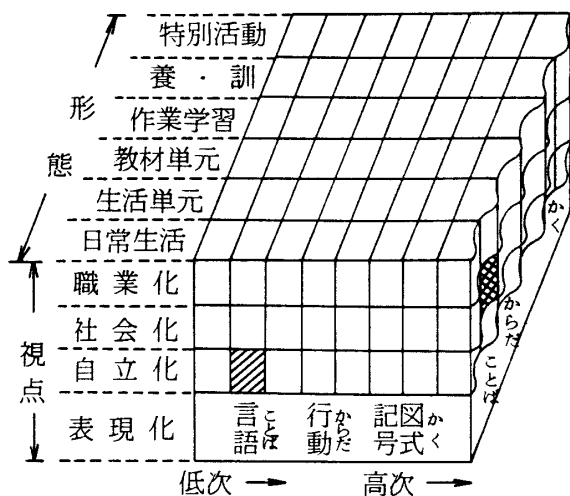
④ 表現化に視点をあてた指導計画の作成では、従来から言われている各教科や領域は、学習の手段あるいは道具のひとつと考えている。むしろ各分野、各項目に示す内容のつながりを重視している。例えば、小学部の低、中学年で実践している自立化を重視した取り組みでは、教科にとらわれることなく、毎日の生活そのものが学習であり、学級のなかでくり返されることが多いのである。

(5) 表現化と単元の設定

表現化に視点をあてた学習では、子どもたちの表現活動に言語（ことば）、行動（からだ）、記号・図式（かく）という3つのことが考えられる。


例えば、話を聞く、～を発表するという学習は言語（ことば）が中心になるだろうし、運動や作業の学習では、行動（からだ）が中心となるだろう。また、絵をかく、日記をかく、図形をかくなどの学習は、記号・図式（かく）という活動が中心となる。しかし、どの例をとってみても、それぞれ言語、行動、記号・図式が活動の中心となるということであって、運動や作業の学習では、当然言語、記号・図式も活動として無視することはできない。この3つの活動を、学習行動の型とし








で考えている。

上図は、表現のための学習行動と学習形態および視点〈目標〉との関係を構造化して、単元設定の基本を示したものである。

図の  は、実践事例・衣服の着脱における自立化をめざして〈P.30〉の場合である。K夫の指導の中で、衣服の着脱を取り上げ、「脱ぐこと」「着ること」を直接動作〈からだ〉を通して体得させることで、自立化の目標のひとつを達成する単元の位置づけを示している。

 の、実践事例・「大山林間学校」の学習に見る社会化の試み〈P.39〉は、中学部全員による2泊3日の学部行事を山場に、約1ヶ月にわたって学習内容を統合し、社会化をめざして生活単元に構成した場合である。単元は統合されたものであるから、3つの学習行動が当然かかわってくるが、その中でさらにこまかく単元設定がおさえられる必要がある。この単元での数学的要素を取りだして言えば、金銭、買物、小づかい帳、土産物を買うなどが学習内容であり、High クラスでは記号・図式が学習行動の中心であり、Low クラスでは行動が中心となる。そして、社会化をめざした学習が展開される。  は、学習を成立させるための最小の単元といえる。

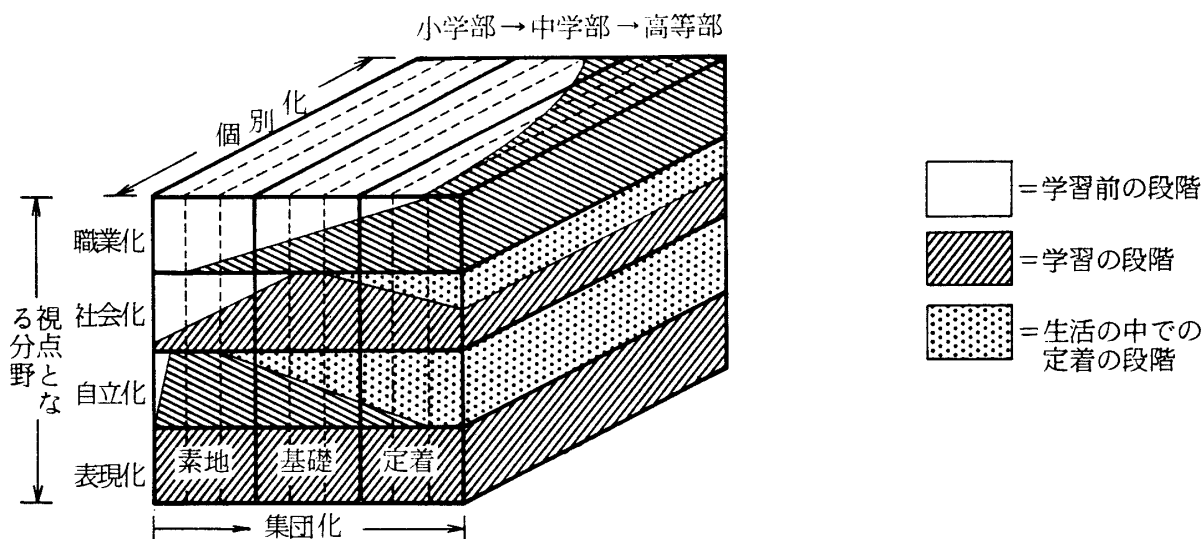
従って、この単元は、段階別教育内容表にある項目と子どもの実態から考えて、小学部から高等部へ、また低次なものから高次なものへ、段階的に一貫性をもって準備される必要がある。

(6) 表現化と基本となる学習過程

① 表現化に視点をあてた各学部での取り組み

次頁に示す図は、表現化に視点をあてた学習過程を構造化して示したものである。即ち、分野の表現化は、すべての学習とかがかわることで、子どもたちの学習が、生活の中での定着に向ってより効果的に働くと考える。極端な言い方をすれば、前に述べたように、発達段階に応じて設定される学習の内容は表現化と統合されることで初めて成立するということである。

表現化に対して、自立化、社会化、職業化の分野は、各学部、各学級により中心となる視点が異なってくる。例えば、小学部では自立化が、中学部では社会化が、高等部では職業化が中心になって学習が編成される。しかも、小学部から高等部に向って、生活の中で定着し、働いている能力や能度（拡大された生活経験）が直接次の学習の中で活かされ、取り組みが工夫されるのである。各学部の取り組みは、次のようなものである。

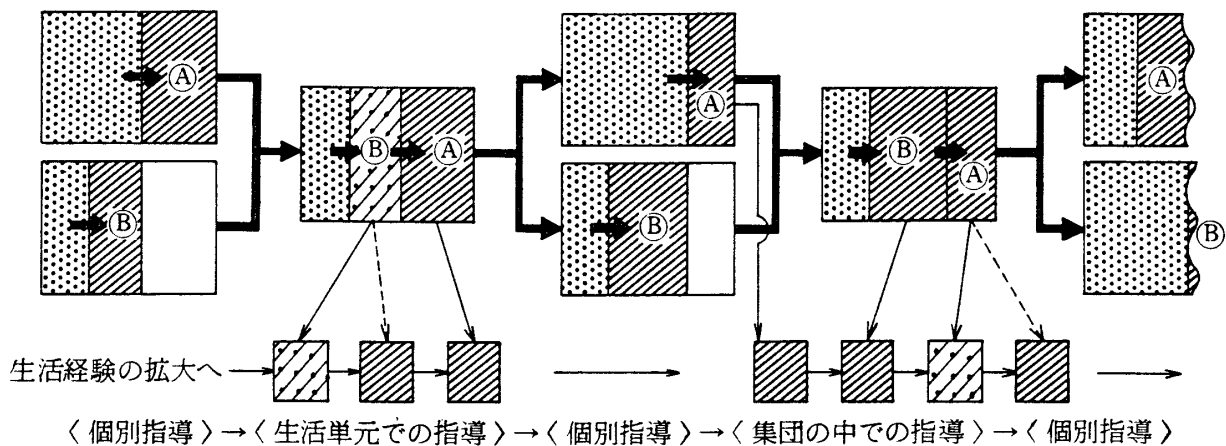


② 表現化と小学部の取り組み

小学部では、表現の芽（表現のための表現、表現の基礎づくり）を育てることと、自立化に重点をおいた取り組みが中心となる。その中で、低学年では社会化の芽を教師とのかかわりの中で育てるような配慮がなされている。（研究紀要・意欲をもって生活できる子どもを育てるために P.18～P.25 の実践を参照）さらに、中学年では、職業化の芽を育てるよう学級の中で、掃除や学級園など働くという面にも目をむけさせようとしている。高学年になると、分野の表現化は素地づくりの段階から基礎の育成の段階に移る時期となる。しかも、自立化の一部は生活の中で定着し、他の学習に力となって働いてくる。この点を配慮し、表現化の基礎づくりにも目を向け、さらに社会化との関連を考えながら、学習の組み立てを工夫しなければならない。高学年の実践事例・図形の認識を育てる指導（P.35）は、表現化を社会化とかわらせることで学習定着を強化する試みの例である。

③ 表現化と中学部の取り組み

中学部では、小学部で育てられた表現化の芽生えを、将来の社会自立に向って学習内容を太らせ、基礎となる諸能力の育成、態度化に努める段階である。ここでの学習は、生活の中で定着してきた自立化の能力、態度を生かしながら、社会に対する関心を広げ、集団参加の能力や態度の育成に重点をおいた社会化の取り組みが中心となる。しかも、1年から3年、そして高等部への関連からは、仕事に対する関心や作業に対する初歩的な技能や態度の育成にむかう非常にむずかしい段階である。しかし、あれもこれもと欲張った取り組みでは、内容が消化されず学習のすべてが中途半端になり、何ひとつ身につかないという結果を生む恐れが多分にある。むしろ、社会化をみざす立場から学習内容を精選して取り組むことで、次第に広がっていく個人差に集団の力を作用させることによって、よりの確に自立への道を歩ませることができるのである。



上図は、中学部の生活単元学習とそれを支える教科等の学習の取り組みの関係を図示したものである。教科等での取り組みは、図の最初に示すように、学習段階も学習量も個人差があり、個別指導が中心となる。統合された生活単元等の指導では、一人ひとりの能力を場に応じて生かし、集団のかかわりを重視した取り組みとなる。この場合④の個別学習は、次の段階で⑤の生活の中で活用されている経験が刺激となって、⑤の学習に働く場合が多い。勿論、④と⑤が逆の立場になることもある。しかも、学習としてめざした生活経験は、学習段階でその周辺の経験の定着としてあらわれ、当初予想しなかった効果を生むこともしばしばある。この点については、中学部の実践事例の生活単元「大山林間学校」の学習のまとめと考察〈P. 〉のなかでくわしく述べている。

④ 表現化と高等部の取り組み

高等部における分野としての表現化は、小学部、中学部を通して育てられ、生活の中で活用されているものを、他の分野とかかわることで、より高次への定着を旨とするものである。高等部は将来の社会自立が目前にあるわけで、当然職業化の取り組みが中心となる。すべての学習は、社会への巣立ちにむかって、一人ひとりに何が必要かは、生活の中で具体的に精選され、職業化を旨として組み立てられている。高等部の実践事例・つまづきを的確におさえた「トロ箱」づくり〈P. 〉の中で、作業を通しての個別指導を流れ作業の中でどう取り組ませるか、ひとりの子どもの経過を追って述べたものである。

以上、前頁の構造図をもとに、各学部の学習との取り組みについて述べた。そこで、各学部の取り組みの視点（目標）、指導の重点を次の表にまとめてみた。

学部	目ざす表現化に視点をあてた具体目標	学年	学年別指導の重点
小学部	<p>自立：日常生活習慣の基本的な事गराを身につけ、人に迷惑をかけるない生活態度を養う。</p> <p>社会：生活の中で、みんなと仲よくきまりよい生活ができるようになる。</p> <p>表現：具体的な活動を通して、表現の素地をつくる。</p> <p>職業：身近なしごとと取り組み、こつこつと働こうとする態度を養う。</p>	低	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遊びを通して、学校の中で表現活動の基礎となる諸能力、態度を育う。 2. 身辺処理の基本的な事गराを、自分で処理しようとする態度を養う。
		中	<ol style="list-style-type: none"> 1. 具体的な活動を通して、表現する力の素地をつくる。 2. 日常生活習慣の基本的な事गराを、自分で処理しようとする態度を養う。
		高	<ol style="list-style-type: none"> 1. 具体的な活動を通して、表現する力を養い、生活の中で活かす態度を養う。 2. 日常生活の基本的な事गराを身につけるとともに、友だちの中で行動しようとする態度を養う。
中学部	<p>自立：基本的な生活習慣を身につけ、健康安全に対する関心を高める。</p> <p>社会：学校のきまり、身近な社会生活のきまりを理解し、社会に対する関心を広げ、集団参加の能力、態度を養う。</p> <p>表現：表現の基礎的基本的能力態度を養う。</p> <p>職業：仕事に関心をもち、基礎技能の習得に努め、最後までやりぬく態度を養う。</p>	1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校での生活の中で表現の基礎を養う。 2. 集団生活の初歩的なきまりを理解し、望ましい社会参加の態度、仕事に対する基礎的な技能、態度を養う。
		2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学習の場の拡がりの中で、表現の基礎を養う。 2. 身近な社会生活や仕事について関心を深め、学校や家庭での生活のきまりを理解し、望ましい対人関係の育成に努める。
		3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 身近な社会生活に必要な表現の基礎を養う。 2. 積極的に身近な社会のしくみや働きに関心をもち、職業に対する基礎的な技能態度を養う。
高等部	<p>自立：生活の中で、自立化の定着をめざし、進んで、健康で安全な生活態度を養う。</p> <p>社会：社会のしくみや働きに関心を深め、対人関係、集団生活の能力、態度を養う。</p> <p>表現：進んで自らの表現力を活かしていこうとする態度を養う。</p> <p>職業：社会とのつながりの中で、職業の基礎的な知識技能の習得に努め、進んで働く態度を養う。</p>	1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 身近な生活の中で表現の定着に努める。 2. 社会の一員としての自覚を育てるとともに、作業と取り組む中で、職業に対する知識、技能、態度を養う。
		2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 作業とのつながりの中で、表現の定着に努める。 2. 社会生活に対する理解をさらに深め、職業に対する知識、技能、態度を深める。
		3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 家庭生活、職業生活に必要な表現力の活用を努める。 2. 作業や職場実習を重視し、職業を通して、社会への巣立ちの準備に努める。

⑤ 基本となる学習過程

表現化に視点をあてた学習指導とは、将来の社会自立に向けて設定された生活経験く段階別教育内容表によるを、表現する力で強化しながら学習することであり、子どもたちが生活の中で活かしていこうとする能力、態度の育成であることは前述した通りである。そのために、必要な教育課程の編成、指導計画の作成、単元構成の工夫などを中心に研究を重ねてきた。さらに、今年度は、最も効果的な学習の過程、指導法についての追究を試みてきた。

そのなかで、学習が表現の過程のどの段階であろうと、どの学習内容や学習形態であろうと、下の表のような学習過程をふまえることが、表現化に視点をあてて、学習が目標に向けて強化されているのだということに気付いた。

導入の段階	展開の段階	発展の段階
① 興味関心意欲の発生 ↓ ② 興味をもつ ↓ 関心をもつ ↓ 意欲をもつ	① みんなの中で生き生きと取り組む ↓ 意識して取り組む ↓ ② 興味関心意欲が持続する	① よろこびをもつ ↓ ② 生活の中でわかる

この3つの段階については、各学部で具体的な取り組みを通して検討を重ねてきた。その中で、子どもたちの実態から考えると、能力や態度の定着は長い目で見なければわからないので、1時間単位の授業は問題にならない。1時間単位毎の評価は不可能、単元を通して定着をみればよいのではないか。生活経験の積み上げ、拡大、定着をみるのだから学期を通してみるべきだなどが、意見としてだされ、問題になった。しかし、これらの問題は、結局は1時間、1時間の授業を大切にに取り組むなかで言えることだという立場から、1時間単位の授業の中でまず検討することにした。

⑥ 基本となる学習過程の各学部での検討

各学部で検討された具体的な取り組みは、次の表の通りである。

学部	学習形態	段階		
		①興味・関心・意欲の発生 ②興味・関心・意欲をもつ	①みんなの中で生き生きと取り組む ②意識して取り組む ③持続する	①よろこびをもつ ②生活の中でわかる
小学部	日常生活	①生活を知る	①行動を通して体験する	①遊びの中で意識する
	日常生活	①1日の流れの中で生活を知る 〈定式化〉	①先生や友だちを意識して取り組む ②相手の必要な中で取り組む	①友だちの中でわかる
	教材単元	①教師が示範する	①相手の必要な遊びの中で考える	①成功感をもつ
	教材単元	①身近な具体物で考える	①遊びの中でくり返す	①生活に活かす
中学部	生活単元	①生活の中から課題をもつ 〈やる気をもつ〉	①ねばり強く取り組む 〈共同で、助けあって〉	①充実感をもつ ②生活に生かして使う

中 学 部	教材単元	①必要を意識した目的をもつ	①具体物の操作による反復練習 ②身体活動、ゲームによる練習	①まとめる
	教材単元	①学習する内容を知る	①課題をもってドリルをする	①確かめる
	教材単元	①興味関心を引出す	①教師の示範を模倣し楽しく取り組む ②教師と共にくり返し練習する	①満足感を味わう ②意欲をかきたてる
	教材単元	①生活の中から課題を見つける ②やり方を考える 思い出す	①ねばり強く取り組む ②はげましあう たかめあう	①やりとげた喜びをもつ ②他の場面に生かす
	作業学習	①作業内容を確認する	①最後までがんばって作業をやり抜く ②協力し合って作業と取り組む	①他の場面に生かす ②生活の中で役立てる
高 等 部	教材単元	①学習内容を知る ②目的意識をもつ	①みんなで考え、みんなでまとめる	①生活の中で生かす ②自覚をもつ
	教材単元	①学習内容を知る ②目的意識をもつ	①話し合って深める ②意見をもつ	①まとめる ②他の場面に役立てる
	作業学習	①作業内容を知る	①最後までがんばって取り組む ②指示された通りに取り組む	①反省する ②日誌をつける
	作業学習	①作業内容を知る	①助け合い、協力して取り組む ②観察する	①日誌をつける ②他の場面に役立てる

しかし、ここに示す学習過程は、具体的な授業の中で検討を重ねてきているが、その妥当性について結論をだすまでに至っていない。まだまだ問題が山積みである。更に検討を重ね、あらゆる指導分野で効果的な取り組みを追究することになっている。ただ、具体的な授業の中で検討を重ねるなかで、授業に効果的に働いた指導法について検討し、追求してきた。検討された指導法を列挙すると、次の項に示す通りである。

(7) 表現化と学習指導法の工夫

再三にわたって述べるが、本校の教育は、すべて表現化を無視しては存在しない。授業が中心となる学習指導も例外ではない。従って、学習過程とその取り組みが、学習形態、内容によって、それぞれ特色があり、異なるように見えるかも知れない。しかし将来の社会自立を旨とし、表現化をめざす本校の立場では、表現の重点が違っても、それぞれの取り組みが、かかわりあい、総合した力となって、生活の中で生きて働くことを理解してほしい。そのためには、常に教師間の共通理解が要求されるし、学部間の一貫した研究推進がなくては、表現化に視点をあてた教育は定着しないという考えで研究と取り組んでいる。

そのため、学習指導法の検討にしても、全学部共通の立場に立って行っている。

① 導入段階での指導法

点検する	学習に適した服装、学習用具、教材及び学習環境を点検する。
確認させる	作業工程の見本を提示し、取り組みを確認する。
気づかせる	指示、提示はできるだけ少なくし、自分で気づかせたり、見つけさせるようにする。
見つけさせる	
発言させる	言えることをさがしてみんなに発言させる。
読ませる	本時目標を板書し、全員が大声で数回読む。
話し合う	生活の中でどう生かすかよく話し合っておく。
課題をもたせる	身近な生活の中から、みんなで課題を見つける。
示範する	まず先生がしてみせる。
必要感をもたせる	「どんな時に困るか」をはっきりさせて、学習内容を知らせる。
意識させる	必要感や必要場面を意識づけていく。
指示する	行動で指示する。ことばと行動で指示する。ことばで指示する。
学習の定式化	一定の軌道を敷いて、毎日そのなかをくり返すよう工夫する。
見せる	絵、写真、スライド、8ミリ、現物をみせる。
競い合う	2組に分かれて競い合う。
ゲームをする	「曲あてクイズ」など音楽的なゲームをする。
歌う	身ぶりをつけて歌う。先生と交互に歌う。

② 展開段階での指導法

治具の使用	仕事を援助する道具を工夫し、作業が容易にできる手助けとする。
流れ作業で取り組む	作業を分担し、助けあって製作する。
作業をする	読み書きを多くする。仕事をする。
報告する	ひとつひとつの作業工程の終わりを正しいことばで言わせる。
聞く、指示を受ける	勝手な行動をさせず、必ずことばで問うようにしむけていく。
発表する	グループで発表する。
発言させる	読み書きを重視し、発言、発表の場を多くする。敬語、ことば使い
資料をみせる	絵、写真、スライドをみせる。に留意した発言。
賞賛する	学習の経過をほめる。握手をしてやり、ことばで励ます。
まとめる	同質グループのリーダーを中心にまとめる。
必要感をもたせる	どこで活用するかを考えさせ、強い必要感を持続させる。
見せあう	先生や友だちの行動をみて、まねたり直したりする。
援助する	できるだけ自分で取り組ませ、失敗しないよう援助する。
誘導する	子どもの思考、行動、態度のひらめきや持続を助けてやる。

示範する	表情豊かな範唱、範奏。
単純化する	行動内容をもつ学習はできるだけ単純化し積み上げる。
はげます	子どもの思考、行動、態度のひらめきや持続を助けてやる。
反復練習する	根気強くくり返す。数の基礎概念。ゲームの前段指導。
等負集団で取り組む	ゲーム、遊びの組み分け。集団での協力、共同、役割分担を考える。
身体表現	アスレチック風な総合運動をする。
リズム遊び	曲想にあった表情や身体表現を工夫したリズム遊び。
ゲーム化する	簡単なルールのゲームを組み立て、数や文字を遊びの中で反復する。
具体物を操作する	身近な子どもの親しみやすい道具を使う。
見学する	社会見学、職場見学、修学旅行、宿泊学習、林間・臨海学校、遠足。
意識させる	友だちを意識させる。直接経験と結びつけ目的意識をもたせる。
遊ぶ	遊び形式に組みかえる。相手のある遊び。

③ 発展段階での指導法

賞賛する	学習の経過をほめる。みんなの中でほめる。おおげさな表情で。
刺戟を与える	生活の中で使えるよう、学習以外の時間も常に刺戟を与える。
認めてやる	作品の良い点を必ずみつけ認めてやる。
成功感をもたせる	失敗させないよう適切な援助や介助をする。
日記をかく	学習したことをどう生活に生かすか提示してやり、日記にかく。
反省会をもつ	一日の学習を思いだし、みんなで話し合う。
復唱させる	学習内容を生活場面でどう生かすかひとりづつに提示し、復唱させる。
聞いてやる	一番楽しかったところはどこかをひとりずつに尋ねる。
聞きあう	先生や友だちの発言に耳を傾ける。
発表する	学習でわかったことを発表させる。
握手をする	よい点を指摘し、握手をする。
家庭に生かす	保護者と連携し、学習を家庭生活に生かす。〈学校と家庭の一体化〉
遊ぎ化する	学習の定着状況を、遊びを通してみながら、次の学習を組み立てる。
生活化する	言葉や漢字を使う。学校の中で用途のあるものをつくる。
学校生活に生かす	日常生活場面での活動を考え、実践の方法を考える。
よろこびあう	完成のよろこびや生活に生かすよろこびを味わわせる。

各学部での授業実践を通して、上記のような指導法を抽出してみた。この項目は無秩序に羅列したに過ぎないし、中にはもっと細分化しなければならないものもある。見当違いのものもあるかも知れない。また、この項目は、実践場面ではいくつかを組み合わされた形で、はじめて効果的な指導法となる。いろいろな事で、検討が不十分なことを反省している。

この指導法の項目は、実践を通して検討を重ねた上で、基本となるいくつかの指導法として集約することで、表現化に視点をあてた学習指導の基本が見付け出せればと思っている。

(8) 学習指導に関する2・3の考察

効果的な学習指導は、指導法が確立されれば成立するというものではない。実際に授業を成立させているのは、一人ひとりの教師であり、子どもたちである。また、子どもの発達を支えているという意味では、保護者もかかわってくる。

表現化に視点をあてた学習指導の基本過程で、「意欲の発生」、「いきいきと取り組む」、「よろこびをもつ」などで、各段階を示したが、その段階にかかわる指導法の項目は、言ってみれば囲碁という定石のようなものである。それを駆使するのは、教師であり、子どもたちであるから、教師自身が、意欲的に生き生きと取り組んでいることが、学習成立の前提条件である。

また、段階別教育内容表から、子どもの発達段階をひとつひとつチェックして、学習を積み上げていくといっても、それほど単純な子どもたちではない。何の変容も見られない日々が続いたり、反対に予想もしなかった効果が見えたりする。また、その変容は必ずしも学習の場で現われるとは限らない。

更に、本校の保護者は一般的に教育熱心で、家庭での家族とのかかわりも無視できない。

このように考えてくると、表現化に視点をあてた指導では、その基本となるものを無視して成立しないのは当然だが、教師一人ひとりの力量にかかっている。このことは、教育すべての営みについて言えることかも知れない。本校では、きれいごとは一切すてて、精神薄弱教育の原点から、子どもたちの社会自立を見直そうとしているのである。

以上のことをふまえた上で、学習成立の諸条件について2・3の点についてふれてみる。

① 教師の態度

まず教師が、「意欲的に生き生きと取り組む」ことが学習成立の前提条件と述べた。その中で「思いやりのある教師」を心がけねばならない。例えば、表現化に視点をあてた学習では、教師が慎重かつ周到に、「子どもが何を表現しようとしているか」、「何を訴えようとしているのか」に、素早く気付いてやることが、表現化をみざす出発点である。また、発問や資料の提示など、子どもの側に立った工夫が常に行われなければならない。例えば、中学部の美術での導入段階における教師発問で、「窓から見えるものは何かな?」に対して、名称の羅列で、次の描画につながる感動を引出せなかった。それに対して、「すごい!いろんなもんがみえる。小さいの大きい、～の形みたいのものもある。まだまだいっぱいあるね。さあ、みんなでさがしてみよう」と、教師の豊かな表現からは、数多くの反応が示され、次の段階へ感動を引出した実践がある。

即ち、学習場面、学習活動における教師の働きかけと、子どもの反応とのかかわり方が、重要なポイントになるということである。

② 指導内容の精選と指導の重点化

子どもの発達の様相を0才時からとらえ、6段階に配列したのが、段階別教育内容表である。従って、ここには、指導すべき学習内容が提示してあるわけである。一方、この教育内容は、子どもたちが、社会自立に必要な獲得すべき生活経験領域の拡大の過程が示してあるわけである。4分野51項目で示した内容は、教育実践の場では更に細分化して目標が設定され、計画され、指導が展開される。ひとつひとつの目標達成が大切だとしても、果して可能だろうか。若し、可能であっても、表現化に視点をあてた本校の立場である、「意欲をもって、生き生きと取り組み、生活の中でよろこびをもつ」ような学習が可能だろうか。はなはだ疑問である。

また、指導法の中で、「意識づける」「必要感をもたせる」「生活に活かす」など、多くの実践の中でとられてきたが、それは可能なことなのか。例えば、金銭の指導では、自分が実際に稼ぐ段階でなければ、意識も必要感もわからないのが普通で、生活に活かすという態度も育たないだろう。「知らないより知っている方がよい」「できないよりできる方がよい」のでは、表現化に視点をあてた指導とはならない。「知っていなければならぬ」「できなければ困る」ことでなければいけない。そのためには、段階別教育内容のすべてが獲得されなければならないのではなく、子どもの実態にあわせ、実践場面での内容精選と重点をはっきりおさえることが重要である。例えば、身体的成熟によって獲得可能なもの。精神的成長により獲得可能なものなど見極め、時期をまてば到達する見通しのあるものなどを無理に計画に取り入れたいしないことである。

③ 家庭との連携

本校の教育が、子どもの生活経験領域の獲得、拡大の過程にあるから、家庭における家族の果たす役割は大きい。養護学校における教育は、家庭における子どもの生活を、学校が援助している面も多いわけである。例えば、身辺処理の習慣化などは、家庭でのくり返しの訓練の結果、学校の中でも定着してきたとみるべきものも多いはずである。従って、学校と家庭は不離一体となって教育は進められなければ、効果を期待することはできない。

小学部では、連絡ノートにより指導事項に対する意志の疎通を欠かぬよう相互に連絡しあって指導を強化している。中学部では、生徒に宿題を義務づけている。これは、従来のような予習、復習的なものや、学校でできなかったものを家庭にもち帰らせるというものではない。学校での学習を家庭でも家族ぐるみで取り組んでもらおうという意図である。更に、「生活に活かす」という観点から、家庭の中での取り組みを工夫してもらおうというもので、生徒、教師、家族の一体となった取り組みを進推しようとしているのである。

4 表現化に視点をあてた学習の評価

本校が基準としている段階別教育内容表は、経験領域表でもある。従って学習評価は、指導の結果から、どの段階のどの項目に到達しているかをみるわけである。同時に、学習の中での興味、関心意欲など